

## ○ワークショップ「国際会計研究会」

開催責任者 ビジネス研究科 白木俊彦

2013年 3月 12日

南山大学名古屋キャンパス J棟 4階 415 会議室



ワークショップは以下のとおり、開催された。

### ◇報告者および題目

1. 小出修平 (仰星監査法人 公認会計士)  
「IFRS の早期導入企業の有価証券報告書の分析」
2. 井上定子 氏(流通科学大学准教授)  
「伝統的外貨換算方法と多国籍企業モデル」
3. 富塚嘉一氏(中央大学大学院教授)  
「収益費用観と資産負債観～企業実態観の探求～」

### ◇ワークショップの討論内容

仰星監査法人の小出修平氏による報告テーマ「IFRS の早期導入企業の有価証券報告書の分析」において、IFRS の早期適用企業における有価証券報告書を分析することで実務上行っている対応及び現状の有価証券報告書における投資情報の有用性について検討を行った。分析に当たっては3社を選定しその中で特徴のある論点を独自に選んで報告された。結果としては、現状の有価証券報告書内には複数の会計基準に基づく財務諸表が存在しており、

一般の投資家向けの情報としては有用性に疑義があるのではないかという点と、IFRSの原則主義に基づく処理については実態は表してはいるものの科目等で画一的な処理にはならず、客観的な判断がしにくい点を指摘された。

流通科学大学商学部商学科准教授の井上定子氏による報告「伝統的外貨換算方法と多国籍企業モデル」においては、現行の外貨換算会計基準であるIAS21は、現在の複雑化したビジネスモデルに適合しないという批判を受ける。しかし、これまでビジネスモデルと外貨換算方法との関連性は十分に検討されてきたとは言えない。そこで、Bartletand Ghoshal (1989)のビジネスモデルを取り上げ、伝統的換算方法と比較検討を行った。その結果、IAS21の採用した方法は複雑なモデルに適合するが、その適用上に問題があることが指摘され、定義も含めた議論が行なわれた。

中央大学大学院国際会計研究科教授の冨塚嘉一氏による報告「収益費用観と資産負債観～企業実態観の探求～」においては、会計基準の国際的コンバージェンスが進むなかで、これを推進する鍵概念として、収益費用観から資産負債観への移行が強調される。最近の会計基準改訂・新設の動きに対して、収益費用観か資産負債観かといったラベル付けに惑わされることなく、いかに企業実態を反映できるかを判断基準とした方がよい。その場合、実態とは何かの解釈をめぐっては、解釈が分かれることも想定でき、また、これぞ真なる定義というものに到達することは困難である。むしろ経済・金融そしてビジネスの発展とともに変わりうるものであり、絶えず探求されつつ、それに応じて会計システムも変化しうるものといえる。

以上の報告に基づく各論者の見解をもとに、参加者が日頃考えている視点から活発な議論が行なわれた。

#### ◇研究成果発表

山内暁、「条件付対価の認識にともない発生する条件付暖簾の存在」、会計第183巻第2号、2013年2月1日（2012年度成果）

近藤智也、「中会社」の会計情報における知的資産の意義」、実践経営学会研究No.4、2012年8月3日（2012年度成果）

近藤智也、「非上場会社の会計情報における知的資産の意義」、『実践経営（第50号）』（実践経営学会機関誌）2013年（発行予定）、（2012年度成果）